

カント理論哲学における自我の問題

——「統覚論」に基づく自己意識および自己認識の究明——

尾崎 賛美

はじめに

「私は私について何を知り得るのか。」本研究はこの問いに答えるべく、イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の理論哲学における自我の問題を考察した。具体的には、『純粹理性批判』を中心に、「自己意識 Selbstbewußtsein」と「自己認識 Selbsterkenntnis」という二つの問題領域から議論を展開した。

それに際し自己意識との連関では、経験の可能性の条件であるがゆえに経験的には捉えられ得ない主観 (自我) に、自己認識との連関では経験的に捉えられ得る客観 (自己) に焦点を当て論じた (本研究では便宜上、前者を自我に関する超越論的領域、後者を経験的領域の問題として位置づけた)。従来のカント自我論の研究においては、もっぱら前者の問題が取り上げられる傾向にあり後者の問題はほとんど論じられてこなかった。しかしカントの自我論は、上述した二つの問題領域が有機的に連関することでこそはじめ、その全容が明かされる。

自己意識に関する議論では、かつて Dieter Henrich がカントを批判する際に提起した「自己意識の反省理論 reflection theory of self-consciousness」に端を発し考察を行った。Henrich はカントが樹立した自己意識のテーゼを「自らへと反省的に向けられた自己についての意識」として解釈した。それに伴いカントが想定したとされる自我は、自己自身へと反省的に向かうその意識において、あたかも実体的靈魂のように予め前提されなければならない、自己意識を通じて自我を捉える営みは常に論点先取を犯すと批判した。それに対し本研究ではカントにおける自己意識とは Henrich が想定したような、(Henry Allison の言葉を借りれば) いわば「second-order な自己意識」ではなく、むしろ自らを対象化しない「first-order な自己意識」であると解釈し、Henrich への応答を通じてカントが本来意図した自己意識の内実を究明した。

自己認識に関する議論では、この問題が従来ほとんど顧みられなかった背景、およびカント理論哲学を貫徹する教義に則した場合、自己認識の議論は成立し得ないとしてしばしば論じられる要因を分析した。その上で本研究は、カントにおける自己認識の内実、自己意識との有機的な連関を得てはじめて、有意味なかたちで明かされることを論証した。

以上より本研究において鍵を握るのが、純粹で根源的な自己意識として語られる「統覚 Apperzeption」の「自発性の作用 Actus der Spontaneität」(「私は考える Ich denke」) である。この「作用」は各章の議論展開において中心的な役割を果たすと同時に、自己意識と自己認識というふたつの問題領域を架橋する接点でもある。それゆえ本研究は「統覚論的アプローチ」という一貫した姿勢でカントにおける自我論の全容解明に臨んだ。

第1章 「論理的機能」としての自己意識

Henrich への応答の第一段階として、カントにおける自己意識および自我の内実を「論理的機能 logische Funktion」という観点から考察した。それはカントにおける自己意識が（自己認識をも含めた）経験的認識一般のアプリオリな可能性の条件としての意識、すなわち「超越論的意識」という位置づけをもつからである。

それに伴いカントが、自我を「実在的主観 reales Subjekt」としてみなされてはならず、したがってまた経験的認識の対象としては決して捉えられ得ないと語る内情も明らかにした。畢竟するに自我（すなわち「私は考える」における私）とは、自己意識が論理的機能であるのと同様、経験が経験として成立するに際し、当の経験をしているところの主観が要請されるべきである、という論理上の必然性から導出される「論理的主観 logisches Subjekt」に過ぎず、『プロレゴメナ』に従えば）たんなる「指標辞 Bezeichnung」以外の何ものでもない。ここからカントが想定した自我に対する Henrich の批判は妥当しないことが帰結された。

第2章 「論理的機能」から「経験的命題」へ

他方でカントは統覚としての自己意識を「実在的な何か etwas Reales」としても語る。もっぱら論理的な位相しか認められなかったにもかかわらず、いかなる事情で実在的な位相が認められ得るのか。本章では、こうした一見矛盾するようにも思われる議論を統合的に解釈すべく、活動性として現実存在する統覚という切り口から、改めて「私は考える」という統覚の作用を考察し、これが「私は思考しつつ現実存在する ich existiere denkend」という「経験的命題」として語られる局面を突き止めた。

こうした議論に基づき、統覚が現に経験を構成する現実的な思考作用として解釈されるとき、たんなる論理的な機能に過ぎない「私は考える」は、「私は存在する」という意識を、換言すれば当の経験主観の現存在を含む「経験的命題」として語られることを明らかにした。それに伴い、経験がまさに経験として現に構成される局面において、「論理的な主観」に過ぎなかった自我は、当の経験とともに「事実、現実存在する何かとして」意識されるようになることを示した。

第3章 存在感情としての自己意識

以上の議論を受け、Henrich による批判を再検討するとともに、カントが本来意図したところの自己意識に関する本研究の最終的な見解を提示した。ここから自我という空虚かつ無内容であった概念の指示する内実が、実は統覚が現実的に作用する局面において感受される「未規定的な知覚 unbestimmte Wahrnehmung」としての存在感情であり、『プロレゴメナ』で語られる「現存在の感情 Gefühl eines Daseins」に相当するものであることを論証した。ここにおいてカントにおける「first-order な」自己意識とは、その意識の内で自己が対象化されない、いわば非明示的な「自己（の存在）意識」であることが帰結された。

しかし、自我は自我としてあくまでも超越論的な領域に属す。それゆえ存在感情として我々が自我を捉えたとき、それは既に経験において語られ得る自己となる。ここにカント自我論における超越論的領域から経験的領域への接合点が示される。

第4章 自己意識から自己認識へ

カントにおける自己認識は、内的感官において現象する自己を経験的に認識することとされる。そこで自己認識の内実の究明に先駆け、経験上では決して捉えられないはずの主観（すなわち超越論的領域に位置づく自我）はいかにして、その同一性を保持しつつ認識の客観（すなわち経験的領域に位置づく自己）となり得るかという問題に臨んだ。その際、先に導出した存在感情としての自己意識こそが認識主観とその客観とを架橋することを明らかにした。

そもそも自己認識も認識である以上、その成立において統覚が作用しなければならない。そしてその働きの中で、主観は自らを非明示的な存在感情として（あるいはDieter Sturmaが提唱するところの「準客観 Quasiobjekt」として）捉える。しかしこの段階では未だ自己認識の全面的な解明には至らない。というのも件の存在感情はその未規定的な性格ゆえに、具体的な規定を与える素材を欠き、その意味ではいまだ認識対象としての自己-現象ではないからである。

第5章 現象としての自己

カントに従えば、我々の認識対象である現象は、その素材の一切を外界に由来する一方で、自己認識の客観である自己は外界に求められ得ないとされる。では自我はいかにして現象し、自己として認識され得るのか。こうした事態こそカントの自己認識論が成立し得ないとされた最大の要因である。そこでカントにおける自己認識の全容解明にあたり、この最も困難な問題—自己が現象するとはいかなることか—の究明に臨んだ。

それに際し、自己認識を語るにあたり避けては通れないもうひとつの問題、すなわち「自己触発 Selbstaffektion」に関し、これが経験的認識一般の成立において果たす役割を明らかにするとともに、自己認識の成立において果たす特殊な役割を特定した。

以上から、主観が自己触発を通じ、自らと意識的連関を有した諸表象を自己自身へと引き付けるとき、外界から受容された諸表象は主観の未規定的な存在意識を規定する情報となることを明らかにし、この一連の過程こそが自己-現象であると論証した。これに基づき最終的に以下のようにして自己認識の内実を突き止めた。

カントにおける自己認識とは、自己を外界において現象する鏡像のように想定しそれを認識することではない。そうではなく、自らと意識的な関わりを有した諸表象を、いままさに自己認識を遂行するところの主観の意識のもとに帰属させ語り直すことであり、ひいてはたんに「存在する」としか意識されなかった主観の現存在を、「しかじかのように存在する（した）」というかたちで経験的に規定する営みなのである。

おわりに

最後に本研究がその始発点とした問い—私は私について何を知り得るか—に対する最終的な答えを提示した。まず自己意識の問題を論じたカント自我論における超越論的な領域からは以下のことが帰結された。私（自我）とは、経験の可能性の条件として要請される「論理的な主観」であり、具体的な内実を伴わない空虚な「指標辞」である。しかし他方でまた、それは「私とは何か」と問うことそれ自体を可能にする意識作用そのものでもある。この作用を通じ主観は自らの存在を感じ取る。ただしそれは端

的な存在感情を実感するのみであり、その内実は決して具体的には与えられ得ない。したがってそこにはただ在るという事実の意識が存するのみである。

次いで自己認識の問題を論じたカント自我論における経験的な領域からは以下のことが帰結された。私（自己）とは、自らが経験した出来事である。ただし自己自身を具体的に語る際、我々は外界から受容された情報を用いて間接的に説明するしかない。その意味で私は自らを直接的に知ることはできず、常に他との関係の内では自らを捉えることはできない。

以上が、本研究の最終的な帰結である。カントに則せば、我々はたとえ自己自身といえども、何らか特別な仕方では自らについて接近することは叶わない。しかしこの極めて自制的な在り方こそ、カントの理論哲学に依拠した自我論であると言えよう。

カント「超越論的論理学」の言語哲学的解釈

繁 田 歩

本論文は、カント認識論における「客観」の諸相を言語論的な観点から再解釈することで、現代的な批判に耐えうる人間の認識の構造と理論を体系的に提示することを目指すものである。筆者はカント『純粹理性批判』の大部分を占める「超越論的論理学」(A50/B74-A705/B733)を研究し、特に認識の客観面についての問題を検討した。客観に関するこれまでのカント研究では「物それ自体」という概念が注目を集めてきたが、筆者はさらに「超越論的客観」、「超越論の対象」、「対象一般」といった諸概念を分析することで、客観面の複層的な体系を明らかにすることを目指した。

しかし、カントの超越論的観念論から帰結する客観の二元性(例えば現象と物それ自体)、そして物自体のような「超越論的」な対象の想定は現代哲学の批判にさらされてきた。特に、今世紀の初頭から哲学界に現れた「新しい実在論」の言説は、カントの「超越論的観念論」の理論を批判し、それと正反対の主張を掲げ注目を集めている。つまり新しい実在論では、物それ自体をも有意義な認識の直接的な対象なのである。このような現状を鑑みて、新しい実在論の枢軸的な思想家である Meillassoux (2006) と Gabriel (2013) の議論、ならびに Nagel (1986) による先駆的な議論へ応答することが本論文の発展的課題である。

しかし、実際のところ、この課題をカントの語彙だけから解決することは困難である。周知のとおり、現代哲学とカント哲学との間には「言語論的転回」という大きな切斷が横たわっている。この転回を経験した現代哲学において、言語哲学や分析哲学の見地は一定の哲学的素地となっているが、カントにとって言語の問題はそれほどの重要性を持たないのである。実際にカントは言語の問題は学問というより人間学的な問題であるとし (Vgl. AA. XVI 39; XXIV 609) 哲学的考察を残していない。この態度は黒崎 (1987, 1994) のいうようにカント哲学の主旨に適っており、概して言語の問題はカント研究において隘路と考えられてきた。しかし、カントは超越論的論理学を通じて論証された諸主張は「超越論的文法論」を導くという記述を残している (AA. XXVIII 576)。このような記述から、本論文では、超越論的論理学には超越論的文法論という言語論の体系が隠されているのではないかと仮定し、その内実を明らかにすることを目指した。

このような目的に際して、筆者は20世紀中頃から盛んになった言語哲学的・分析哲学的なカント研究の手法を採用した。このような研究方法は、Bennett (1966, 1974)、Hogrebe (1974)、Nolan (1979)、Schönrich (1981)、Höffe (2004)、Hanna (2006)、Stang (2015)、Bunte (2016) などの研究に代表されるものである。筆者はカントの超越論的文法論を、言語哲学の慣習にそくして「意味論」と「統語論」との両面からなる考察を進めた。なお、カントと意味論の関係については Hogrebe (1974)、統語論との関係については Schönrich (1981) が示唆深い研究を残している。これに対して本研究は、先行研究において不十分であった、文法論に関する哲学史的な考察を補充することで、カントと言語論との関係性について一層の精緻化を目指した。

さらに筆者は議論のなかで、それぞれの観点によってとらえだされる対象の領域には外延的な相違があることを見出した。それぞれの段階に適切な対象の領域設定を行うことは、認識の客観面を、内包と外延の点で体系的に分析することを意味しており、本研究の重要な課題である。これまで述べてきた目標、つまり(1)カントと言語の連関点を明確化させ、(2)カント認識論が有する複層的な対象領域を規定していくことで、(3)現代的批判にも耐える認識の言語・論理的な基本モデルを提示する、という目標は以下の三つの段階に分けられ遂行された。

第一に、本論文は初めに超越論的論理学が形式論理学とは異なり「内容」を有する論理学であることを確認する。この内容とは「対象一般」の概念であり、超越論的哲学にとっては存在と無とを含意する「最高概念」であるといわれる。つまり、超越論的論理学は対象一般という内容にかかわることによって意味論的に充足可能な論理となるのである。この対象概念は純粹悟性概念との関連によって、未規定的であるが超越論的な「意義 *Bedeutung*」を有することが明らかとなる。もっとも、この領域のなかで感性的所与の領域のみが「意味 *Sinn*」を有するものとなる。両者をあわせて超越論的論理学における超越論的意味論の領域は存在と無とを含む最も広い未規定的な対象領域であることが明らかになる。対象一般という領域を認めることは Nagel へ応答する起点となる。Nagel の批判は、カントの理論では主観から独立の対象を認めることができないという点を観念論として非難するものである。しかし、そのような対象も依然として対象一般の領域に含まれうる、この点を Nagel は看過しているのである。つまり、カントは感性と悟性の共同する狭い領域にのみ意味を認めているのではなく、依然として感性に与えられていなくとも、対象一般の概念とカテゴリーとの概念相互の関係において、抽象的で純粹な意義を認めているのである。したがって、Nagel の批判は部分的にしか妥当しないのである。

第二に、上述の広大で抽象的な対象領域のなかで、実際に我々人間の感性的な対象となりうる領域に視野を制限する。これに際して筆者は、現象の根拠として語られる「超越論的客観」の概念と、すべての判断において「私」という語によって表示される統覚とが「相関項」として表現されている箇所注目した (A123, A250)。主観と客観それぞれの根拠としての超越論的客観と超越論的主観とは認識を成立させる「総合」の必要不可欠な構成要素であり、片方を欠いてはいかなる意味においても存在しえないのである。この意味においてそれらは相関項なのである。両者がカテゴリーを通じて総合的に結びつくことこそ、判断を統語論的に構成するアプリアリな根拠なのである。このような議論によって、超越論的な次元において主語と客語が相関関係にあることが超越論的統語論であるといえる。つまり、客観を認識主観の文法的対格をとして理解するのである。このような主客相関の認識構造において、我々人間の統覚が関係するのは超越論的客観の領域であり、現象の根拠たる「或るもの一般」の領域なのである。この領域は上述の対象一般の広大な領域に比べれば人間の認識に限定された概念であることが理解されよう。一方、このような立場は Meillassoux (2006) によって「相関主義」として非難された。Meillassoux はカントのコペルニクスの転回に注目し、カントの認識論は人間的な観点依存的なものであり、「先祖以前性」に代表されるような対象を扱えない観念論的な教説であると批判する。しかし、この主張はカント認識論の側面だけを強調して批判するものであり不十分である。つまり、Meillassoux はカント認識論の観念論的な側面のみを批判しているのであり、カントを真正の相関主義と理解する場合にはこの批判は当たらないのである。というのも、カントの認識論は上に述べたような主観と客観の対等な関係によって支えられているのであり、観念論論駁に述べられていることから明らかにように、カントにとって主観さえもが客観によって確実なものとなるのである。このように、カント認

識論において主観と客観を統語的な相関項として対等にとらえることで新しい実在論からの批判が不十分であることを指摘することができた。

第三に、これまでの議論を踏まえて、カントの「超越論的文法論」という構想を再検討する。筆者の見解では、カントは超越論的文法論の概念によって人間的認識に特殊な言語規則の基本構成を意味していた。つまり、認識主観が現象の世界を統語解析し経験的な知を拡張するための、人間的言語規則こそ超越論的文法論という構想の意味だったのである。そもそも、人間的認識によってえられる「知」は非言語的で直接的なものではありえず、経験的判断を通じて推論的にえられる言語的なものである。さらに我々は「可能的経験の領域」を超えては有意味な判断をなしえず、つねに可能的経験の「文脈」に客観的判断を加えることで知識を拡張する。これらの文脈は際限なく、そして複数の方法で記述されるものであるが、我々が何かを客観的な経験として確保するためには、未規定的な現象の多様にカテゴリーを通じてかかわることが必要不可欠である。このような営みをカントは「現象を総合的統一にしたがって統語解析する buchstabieren」(A314/B371) ということによって表現していた。このようにしてカント認識論における世界の記述的理解の構造が理解された。ここで Gabriel による「世界」それ自体に向けられた批判に立ち向かう必要がある。Gabriel によれば、もし最大の世界があるならば、それはすでに何らかの意味領域の内部にあることになるので不可能である。これまで見てきたように、カントは「現象の総体」を「世界」としている。ここで問題となるのは、カントが現象の世界という領域に最大の領域という性質を認めていたか否かである。結論から言えば、カントにとって世界とは、「量」という数学的な観点から考察する限り、有限とも無限ともいえないのである。しかし、カントが現象の総体という領域を認めていることもまた事実である。そこで筆者はカントの描写する現象の世界は拡張の可能性を否定しない集合（開集合）であるという解釈案を提示した。このような解釈を採用すれば、Gabriel の批判の問題点を指摘することも十分に可能となる。

以上の議論を通じて、第一に超越論的論理学が世界という文脈を経験の対象に分節化し「判断」という言語活動を通じて記述するための規制を提示していること、すなわち超越論的文法論としての意義を含みもつことを確認した。第二に未規定的な「対象一般」という意義の領域において、「超越論的主観」と「超越論的客観」との主客相関の統語論的構造が有意味な経験を成立させているということを明らかにした。また、第三に現代哲学からの批判に積極的に応答した。これら三つが本論文の成果である。